

清元 文売り

1820年11月江戸玉川座で三世坂東三津五郎が士農工商に見立てた4人が逢坂山の関所を通る趣向の四変化の中の一つとして上演しました。商にあたる部分が本曲で、京都島原の傾城大淀が梅の枝につけた恋文を売って歩く姿を描いたものです。廓勤めの身の自分と、同じ傾城である小田巻が男一人をめぐる恋争いをし、廓中が大騒動になる様を踊ります。後半は西川鯉三郎振付で「吉原雀」の曲にのせて文を持って踊り幕となる、吉原情緒たっぷりの楽しい曲です。

同じ身すぎも様々に めでたき春の懸想文 これは恋路を売り歩く 文玉章
の数々に クドキ上手に惚れ上手 または相惚れ片想い 緑の種を結び文
これも世渡るならいかや

「さあさあ これは色を商う文売りでござんす。私の商う文の数々は宵の
睦言 まだなこと まあ聞かしゃんせ」

流れせわしき憂き勤め かわる夜毎のその中に 惚れた男の意地悪う おっ
と よしてもくれの鐘 その手で深みへまたおれをかける心と 見てとった

野暮な口舌の只中へ 降って傍から只一人 「同じ廓に小田巻という傾城が
毎晩送る文の数々」 三万三千三百三十三本程ゆびに曲輪の文使い 返事のない

に腹立ちて顔に紅葉の打掛を　とって脱ぎ捨て私が傍　「これ勝美さんいやな
お方に惚れやせぬ　今までお前が大事にした　アノさんを今から私に下さんせ」
貰いに来たとすっかりと　こっちも日頃の癩癩酒　「これ小田巻さんとやら

せっかくお前の　ごむしんじゃがもう百年もたった後　松葉をそえて主さん
あげよう」あだ馬鹿らしいと言いさまに　突きのくはづみにばたばたばた　縁
から下へ落ちの人　あご痛みと泣きいだす騒ぎの聲に小田巻が　遣手引船仲居
飯炊出入りの座頭按摩とり　神子山伏に占やさん　せつた片しに下駄片し　草
鞋がけで来るもあり　台所から座敷まで太夫さんの仕返しと　ここでは打ち
合いひねり合い　銚子かん鍋踏返し　そりゃこそつなみが打ち混ぜて　隠居
が子を生むヤレ取り上げて　ソレ鯉節よ搦鉢よ　くわらくわらびしゃりと
鳴る音に　神武以来の悋気争い此の事世上に知られけり

吉原雀の雛から飼われて山がら小がらの嘴なんぞで　てれんの初音を　聞いて
もくんねえ　うそ鳥やないとの日文の駒鳥　そこらの目白が見つけて鶺鴒
約束雲雀は昼でもよしきり　一寸格子へかほどり出せとはさりとはひわ鳥
鶯の魂膽秘密は手管のくだかけ　奇妙鳥類籠の鳥

よどまぬ水に月影も暫しと留める逢坂の関に残せし物語いさましかりける
次第なり